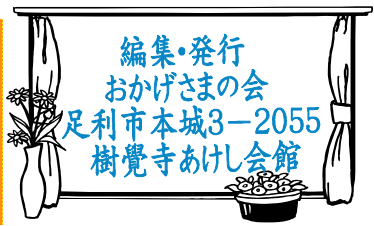


# おかげさま



何も言わずに、読んでみてください。

## 自分で自分の始末を つけ得ないのが人間の悲しさである

高光大船師の言葉は簡潔で明瞭である。すべてが直言であるため、知識や常識で受けとめようとしても木っ端みじんに碎かれるだけである。

## 煩惱具足者は煩惱不足者とは違う。

自分の経験で思案分別を立てておられる煩惱不足者に、他力本願という真理が信知できるものでない

我にもあらぬ我を我と認めて、自我に我執して、この自我で人を求め、世を求め、国土を探している間は、すべて得るところの結果の泡沫の悲しきものに過ぎないであろう。

## 回心なき聴聞は自力の聴聞であり、ただなる徒勞である。

このように、師が具現する言葉はなにも文章だけではなく、おそらく説教でも日常会話でも同じように自在に語られていたのだろう。しかも「信念を衣食とする生活」から発せられたひと言ひと言には、論理も解釈も説明も不要であったに違いない。

「最近の坊さんの説教は難しくってちっともわからん」ということを門信徒からよく聞くことがある。難しいというからには話が理屈っぽくてわかりにくいということだろうが、どうもそれだけではなさそうだ。言葉が生きてもおらず、響いてもこないということが重なっているようだ。

かつて「日本の子どもたちの瞳から輝きが消えてしまった」と、海外から帰ってきた友達から聞いたことがある。今も輝きを失ったままの子どもたちの状況は、何一つ変わっていないし、一年間に三万二千余人もの人が、自ら命を絶たざるを得ない社会全体の闇も深刻だ。





それにもかかわらず、いまだにあらゆることを知的に分析して理解することが不安と闇をはらう最善の策であると信じる人が増えてきたようだ。書店に行っても、「わかる」というタイトルのついた本が目につくようになった。『一目でわかる〇〇』『よくわかる〇〇』もあれば、『親鸞がわかる』という本までもある。あらゆることがわかることによって問題が解決されるならば、六百六十六兆円もの国や自治体の借金の返済も、過労死や児童虐待をなくす

ことも、戦争や環境破壊なども一気に解消することができるだろう。

しかしこの国では、わかって安閑と評論する知識人は非常に多くなってきたが、人の世の悲しみを抱き続ける人は少なくなってきたようだ。知識も才能も、煩惱を増長するものだという深い嘆きから、「そんなものは分別じゃ！」と斬断する人もいなくなってしまうし、知識だけでは自分の生死の解決の始末すらもつけ得ないことに悲しみすら感じなくなってしまう。

また、師は「人間生活が無始から無終に続く一本道の迷道であり暗黒道である以上、驚異なしの聞法や、蓄積的の聴聞や記憶が何で聞くことになるものぞ」と叱責している。知性を破って聞く者の身体の内奥にまで響いたであろう、生前の師の説法に遭えなかったことが残念でならない。

和田 浩 (石川・浄泉寺) 東本願寺出版部 (大谷派) 発行『今日のことば』より転載

驚いていただけました  
 でしょうか。 散るままが  
 浮かぶ容姿の蓮の花。



【御二河白道図】  
 (1951年、紙本着彩、135.0×176.0cm、高岡市・善興寺蔵)  
 右上面の青く逆巻く水の流れと左下面の紅蓮に燃える火の河がせめぎ合う画面、火の河は衆生の怒り、水の河は衆生の女人歌をあらわし、間を定る白い道が極楽へ通じる清い道、阿彌陀仏の教いを説く説話をもとに描いた富山藩在最後の作

## あけし酔話

### お釈迦様の生涯 成道



アシヴァッタ樹下での禅定ぜんじょうによって、さとりにいた至ったお釈迦さまの内面を知ることはできませんが、仏伝には、「降魔こうま成道じょうどう」の話として語り伝えられています。

悪魔あくまナムチの強迫きょうはくや誘惑ゆうわくに惑わされず、その魔まを降伏こうぶくさせたと伝えられているのは、さとりをはばむ魔との闘いであり、それは自分自身との闘いを意味しているのでしょう。

利益りえき・名声めいせい、社会的地位…。一般的には、これらの誘惑まに負けてしまうことが多いのですが、自分はきっと勝ってみせる、と。誘惑に負けて苦の世界で生き延びるようなことはしまい…。いかなる誘いであっても、きっと禅定の智慧ちようこくで超克ちょうこくしてみせる、と。

このような強い決意で臨みのぞ、ついに内なる煩惱ぼんのう(執着しゅうじやくの心)を克服こくふくし、もはや輪廻りんねにしばられることもなく、完全に開放された境地に至り、「我は仏陀(真理に目覚めた者)となれり」と宣言したのです。

ときに十二月八日、お釈迦さまは三十五歳あかつきみょうじょう。暁の明星がひとときわ輝きを増したとつたえられています。そして、その地でさとりを開いた人(仏陀=ブッダ)となったことから、後にその地はブッダガヤーと呼ばれ、アシヴァッタ樹は、その下で菩提ぼだいじゆ(さとり)を得たことから菩提樹と呼ばれることになりました。

お釈迦さまのさとりの内容を「縁起えんぎ」といいます。これが存在すれば、あれも存在する。これが生ずれば、あれも生ずる。これが存在しなければ、あれも存在しない。これが滅すれば、あれも滅する。

つまり、相互そうごに依存いぞんして存在するという関係だけではなく、相互に依存して消滅する関係をも含めて「縁起」というのです。

この縁起の理を用い、むみょう“苦”の根本原因は“無明”であるときとめました。無明しんじつそうとは人生の真相に関する無知であると教えられます。

いいかえれば、自分の都合つごうでしか物事を見ていないので、真相の相がわからない。自分の都合だけで物事を見て、思い通りにならないといって苦を招いたり、さらに欲の心を起こして苦を深めていくのです。

つまり、無明を滅すれば、苦悩もまた滅すると教えられているのです。

(続く)





# あけし あれこれ ばら (薔薇)

春到来、草木の芽があつという間に顔を出し、ぐんぐんと背伸びをするように伸びてきて、若葉がとてもかわいく綺麗。その中でちょっと目立たない存在のバラの新芽、花が咲くと目立つんですけど。境内にも何種類かのバラがあります。一本は前住が植えたもので、確か「クイーン・エリザベス」といったと思います。丁寧に手入れしてあげられてなくても、年に2度ほど咲いてくれます。ありがとうございます。



## バラ(バラ科) バラ属

「ばら」の名は和語で、「いばら」の転訛したもの。漢語「薔薇」の字をあてるのが通常だが、この語はまた音読みで「そうび」「しょうび」とも読む。漢語には「玫瑰」や「月季」の異称もある(なお、「玫瑰」は中国語においてはハマナスを指す)。

日本の原種は、イザヨイバラ、サンショウバラ、タカネノイバラ、テリハ



ノイバラ、ハマナスがある。古くバラは「うまら」「うばら」とよばれ、『万葉集』にも「みちのへの茨の末に延ほ豆のからまる君をはかれか行かん」という歌がある。

『常陸国風土記』の

茨城郡条には、「穴に住み人をおびやかす土賊の佐伯を滅ぼすために、イバラを穴に仕掛け、追い込んでイバラに身をかけさせた」とある。常陸国にはこの故事にちなむ茨城という郡名があり、茨城県の県名の由来ともなっている。

